



布を巡る旅

第3回 ～インド～ ジャンボニ～カンタ刺繍のふるさと

後藤ふたば

カンタおばちゃんことサキーナさんに初めて会ったのは、ニューデリーの祭会場だった。その片隅の掘立小屋で、積み上げたサリーやドウパタ（大判のショール）に埋もれている小柄な女性、それが彼女だった。通りがかりに小屋に入つた私は、そこに積んである布のすべてが、手刺繍に埋め尽くされた極上のカンタであることを知り、気分が悪くなるほどに興奮し、全部欲しくて狂いそうだった。

長いこと、カンタを探していた。大都市にある西ベンガル州の物産店に行けば、もちろんそこにカンタはある。しかし、それはあまりにも粗雑で、心動かされるものではなかった。国境を越えてバングラディッシュにも足を運んだが、ここでも「これだ」と思えるカンタには巡り合わなかった。そうして探し続けて数年、ようやく私は、息を呑むほどに素晴らしきカンタに巡り合ったのだ。

ベンガル地方に伝わる手刺繍のことを、ノクシカタ、通称カンタと呼ぶ。元々は古く弱くなったサリーを補強するために重ねて刺したのが始まりだといわれている。いわゆる刺子である。それは少しずつ「より美しいもの」へと変化し、やがてカンタは、動物や人、精霊などをも描く芸術作品へと昇華していった。

小見出しブオンドは後で修正します

その日、私は資金が許す限りのカンタを手に入れ、サキーナさんの名刺ももらった。そしてその翌年、彼女を訪ねる旅に出ることになった。名刺にある地名を求めてグーグルマップを何日もにらみつけ、ようやくそれらしい町を見つけ出した。名刺には番地らしき数字はないが、町まで行けば何とかなるだろう、片端から人に尋ねれば行き着くに違いない。インドに飛んだ。

布と針と糸さえあれば……

そこはコルカタから列車に数時間揺られ、バスに乗り、馬車に乗り、最後はリキシャに乗って行き着く小さな村だった。彼女は運良く家に居てくれ、突然現れた私を驚きながらも歓迎してくれた。作業場に案内され、カンタが生み出される工程を聞く。そしてうず高く積み重ねられている布の山を、一緒に一枚ずつ開いては堪能した。至福の時間だった。

サキーナさんのカンタは、シルクの生地にも綿糸を刺して作られる。薄い布に太い糸を刺して、布が不自然に引っ張られない状態を保つのは非常に難しい。し

かし彼女は自在に両の手を動かし、布を傷めることなく針を刺し進める。細かく動く針先は、みるみるうちに犬や鳥や村の暮らしを布の上に描き出す。

彼女が生み出すモチーフは、実に美しく可愛らしい。配色も見事だ。時に渋く、時にビビッドに。サリーもドウパタも、鑑賞に適う完璧な一枚としてデザインし、気が遠くなるような回数、針を刺す。

「布と針と糸さえあれば、女にも立派に出来る仕事だからね」。私の賞賛に対し、彼女はそう答えた。

今も二年に一度はインドに行き、カンタおばちゃんを訪ねる。デリーで会えることもあれば、コルカタのことも、村まで行くこともある。新作を見せてもらい、シルクの相場の上がり下がりや、前に譲ってもらったあの小鳥のサリーをまた欲しいなとか、同じものは二度とは作らないのさとか、そんな話をお茶を飲みながらする。

そして、その場にある一番いいカンタは、必ず私のものになる。私がそれを売ることにはない。

ことう・ふたば ● 東京生まれ。元・辺境旅系ライター。軽井沢の浅間山麓に住み、現在はデザイン・縫製を主な生業としている。布集めの旅は今も変わらず、どこへでもザックを担いで行く。布服屋リンコル店主。



布の上に森があり、太陽が照り、生き物たちが駆け回る。ベンガルの大地上は決して肥沃ではなく、人々の暮らしは厳しい。そのなかで生まれたカンタの、何と自由奔放で明るくおらかなことか。



- ① コルカタの露店、彼らもカンタ職人だそうだ
- ② ジャンボニ村にはまだ水道がなく、池が皆の水場だ
- ③ 馬車とすれ違うラクダの群れ
- ④ 国から何度も表彰されたこの手技で、家族も養ってきた
- ⑤ 黒い布に型紙と白い粉で下絵を写す